

石神遺跡の調査

－第116次

1 はじめに

石神遺跡は飛鳥寺の西北に隣接し、水落遺跡と一体の遺跡である。7世紀～8世紀を中心に建物や広場、井戸、溝などの施設が計画的に配置され、幾度も造り替えられたことが判明している。最盛期は斉明朝の頃とみられ、『日本書紀』にある飛鳥寺の西で蝦夷らを饗宴した施設の可能性が考えられる。

奈文研は1981年より調査を続けており、今回が14回目となる（以下、第14次調査とする）。調査の主目的は飛鳥藤原第110次調査（石神遺跡第13次調査。以下、第13次調査と略す）で斉明朝期の北限と考えたSD3896と、石神遺跡第9次調査（以下、第9次調査と略す）などで検出している南北の基幹水路SD900との関係を明らかにし、北限と考えられる区域の状況を解明することである。調査区はおよそ東西25m、南北18mの方形で面積約490㎡。調査面積の累計は第114－1次調査も含めて約13,500㎡に達する。調査は2001年7月2日から行ない、12月14日に埋戻しを完了した。

2 検出遺構

基本層序は水田耕土、床土、包含層（灰褐色土）、各時期の整地土（黄褐色砂質土・褐色砂質土・炭の混じる灰色粘土など）、地山（暗灰色粘土・青灰色粘土・暗灰色砂質土）である。地山の暗灰色砂質土からは激しく湧水する。地形は北西へ下がる傾斜面で、検出した溝の遺構も北、西へ下る勾配を持つ。石神遺跡は古代においても複数回の整地がなされているのに加え、傾斜面を削平して水田に造成しているために、土層が非常に複雑である。なお調査区北端での遺構面は標高97.3mで、第1次調査区の石像物出土地点との高低差は5mに達する。

遺構の時期区分は基本的に第9次調査と同じで、大きくA期（7世紀前半～斉明朝）、B期（7世紀後半）、C期（藤原官期）に分けられる。そのうちA期は3期に細分でき、A3期の遺構は重複関係でさらに細分できる。

A1期の遺構

大規模な石組溝が東西方向と南北方向に造られる。

SD3896 調査区北端にある東西方向の石組溝。幅は

底で2.1m、深さ0.6m。側石は20cm大の自然石を5段ほど積み上げる。底石はもたない。埋土は砂や粘土が互層状に堆積し、相当の水量があったと考えられる。

SD1345 調査区西側にある南北方向の石組溝。幅1.6m、深さ0.4m。側石は20～30cm大の自然石を4段ほど積み上げる。底石はもたない。埋土はSD3896と似た状況である。北端はSD3896とT字形に接続し、角はまるく造っている。廃絶時に北端をSD3896側石で塞ぐが、両溝ともかなり埋まっていたらしく、現状の最上段だけを埋土の上に構築している。またSD1345を塞ぐように打ち込んだ杭の痕跡もある。

A2期の遺構

東西堀と東西溝が造られ、南北溝も付け替えられる。

SA3893 調査区中央にある掘立柱東西堀。柱間2.1m。東西とも既調査区外へ続くが、等間で割り付けた場合にSD3960と重なる部分には柱穴がない。柱穴はいずれもA2・A3期の他の柱穴と同様、柱を立てた後に整地して掘形を覆う。第13次調査区と同様、SA3893周辺に黄色土が帯状にあり、基壇状を呈していたと思われる。

SD3891 調査区西南にある東西方向の石組溝。幅約0.6m、深さ0.3m。側石は20cm大の自然石で、底石はもたない。埋土は砂質土が堆積している。西は既調査区外へ続き、東はSD900にT字形に接続しておわる。接続部は角をまるくつなげるが、北側石は失われている。

SD900 調査区西側にある南北方向の石組溝。SD1345を2.4m西に付け替えたもので、第4次調査区の井戸SE800から北流する基幹水路。幅0.6m、深さ0.3m。側石は20cm大の自然石を2段ほど積むが、大半は基底石だけが残る。底石はもたない。埋土は砂質土が堆積している。C期のSD1347に削られている部分が多い。

SD3960A 調査区東側にある南北方向の石組溝。SD3960は東西の側石の大きさが異なり、東側護岸が方位にあわせた直線、西側護岸は途中で大きく屈曲する。西側護岸の状況は改修の結果の可能性があるので、当初は直線状の溝だったと考える。SD3960Aは幅約1.4m、深さ0.3m。東側石は20～30cm大の自然石。SD3896との接続部は、のちの敷石があり不明である。

A3-1期の遺構

東西溝が付け替えられ、掘立柱建物2棟が建てられる。

SD3950 調査区北端にある東西方向の石組溝。

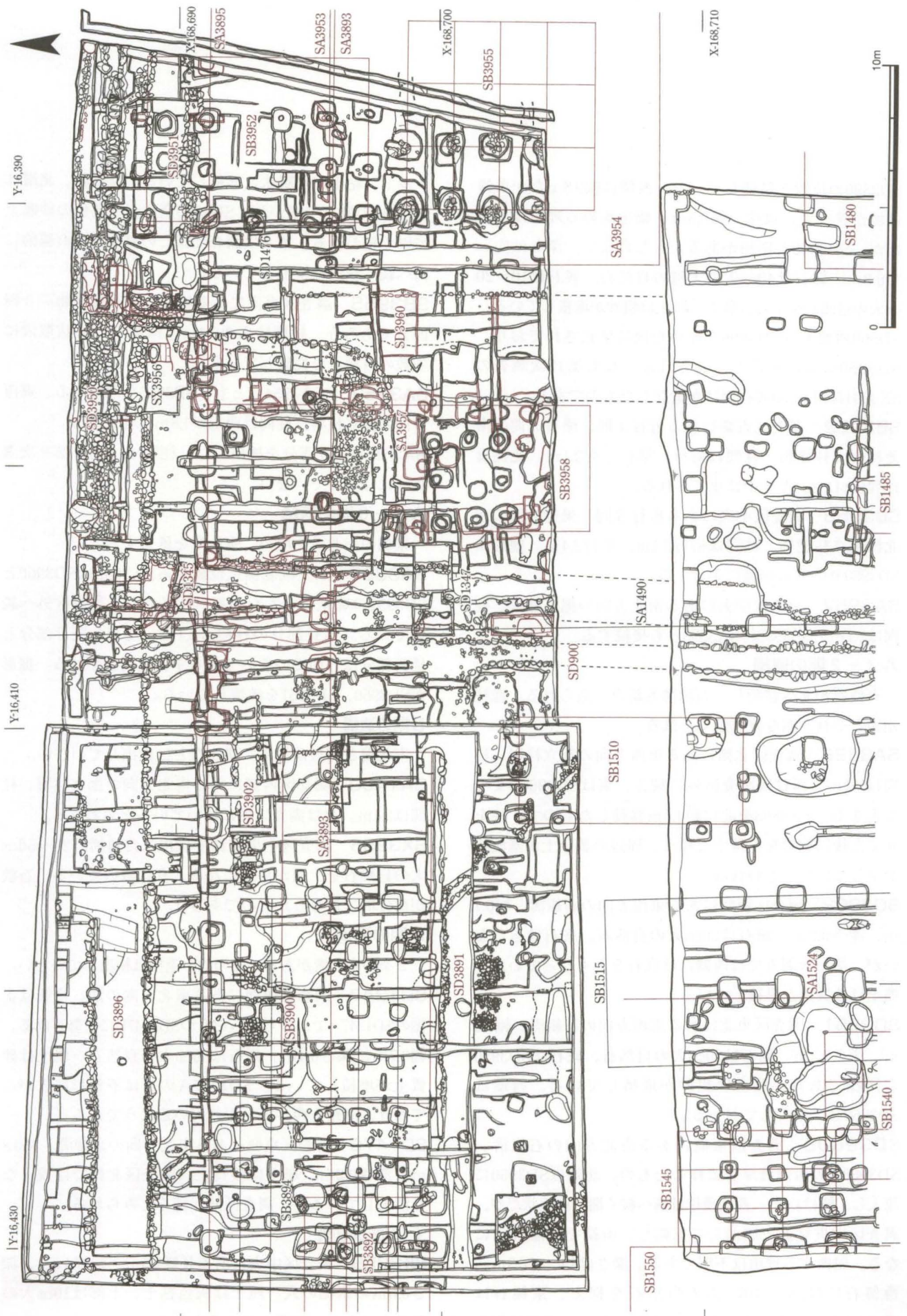


図76 第116次調査遺構平面図 1:200

SD3896の位置を踏襲している。西側は幅0.9mだが東側は幅が狭まり、東端で幅0.3m。幅を狭める理由は不明だが、SB3952と関係があるかもしれない。深さは均一で0.2m。側石は40cm大の大型の自然石。底石は10～20cm大の自然石を平らに敷く。埋土は粗砂が堆積している。SD900西側石はSD3896を埋めた後に延長されており、SD3950に接続するとみなされる。なお第13次調査のSX3904はSD3950底石だけが遺存したものである。

SB3952 調査区東側にある桁行4間、梁行3間の南北棟掘立柱建物。柱間は桁行、梁行とも2.1m。北側妻柱列はSD3896埋土中に建てられる。

SB3958 調査区中央にある桁行3間、梁行2間の南北棟掘立柱建物。柱間は桁行2.1m、梁行2.4m。掘形はSD3960Bの側石据付に先行する。

SA3957 調査区中央にある南北方向の掘立柱塀。柱間は2.1m。SB3958、SA3893とも接続する。

A3-2期の遺構

東西塀が北へ移動し、石組溝も新たに造られる。総柱建物とそれを囲む塀も建てられる。

SA3895 調査区北側にある東西方向の掘立柱塀。柱間は2.1m。西は既調査区外に続き、東はSD3960Bまでで止まる。SA3893を北に約4.5m移動したもので、柱を立てた後に掘形を整地土で覆う。周辺の黄色土が基壇状を呈していたと思われる。

SD3902 調査区西側にある東西方向の石組溝。幅0.7m、深さ0.2m。側石は20cm大の自然石。底石はもたないが、第13次調査では西側だけ底石をともなっていた。埋土は砂質土が堆積している。

SD3951 調査区東北にある東西方向の石組溝。幅0.3m、深さ0.2m。側石は30cm大の自然石、底石はSD3950と同様である。埋土は粗砂が堆積している。西端はSD3960Bに流入しておわる。

SD3960B 調査区東側にある南北方向の石組溝。SD3960Aの西側護岸を改修したもの。北端はSD3950に流入し、幅は1.4m。西側護岸は南へ緩く開く直線状だが、調査区中央付近で屈曲して拡幅し、南端では幅3.8mになる。屈曲する理由は不明である。深さは均一で0.3m。西側石には30～40cm大の自然石を据え、東側石はSD3960Aを踏襲する。底石はSD3951との合流部以北だけにSD3950と同様の底石を敷く。埋土は粗砂、細砂、

シルト、粘土が互層状に堆積している。廃絶時、北端はSD3950の側石で塞がれ、SD3960全体が黒褐色の砂礫土で厚く覆われる。第9次調査ではこの整地土が直線的に南へ続く状況を検出している。

SB3955 調査区東南にある総柱の掘立柱建物。3間四方であろう。柱間は東西2.4m、南北1.8m。抜取穴に多数の自然石を投棄している。

SA3953 SA3954とともにSB3955を囲繞する、東西方向の掘立柱塀。柱間は西端が1.8m、他が2.1m。

SA3954 5間分を検出した。柱間は1.8m。第9次調査区には及んでいない。

A3-3期の遺構

東側の南北溝を埋め、東西塀を延長する。

SA3895 調査区北側に位置するSA3895はSD3960とSD3951の廃絶にともない東へ延長され、調査区外へ続いている。延長部分の柱間も2.1m。ただし既存部分と延長部分は等間であつておらず、柱間がずれる。掘形がSD3960、SD3951を破壊している。

B期の遺構

南北塀と石敷がある。建物などは検出していない。

SA1490 調査区西側にある南北方向の掘立柱塀。柱間は2.4m。北は調査区外に続いていると思われる。

SX3956 調査区中央北側で検出した遺構。20～50cm大の自然石を上面が平らになるように敷いている。石敷が部分的に遺存したものであろう。

C期の遺構

2条の南北溝がある。その他の遺構は検出していない。

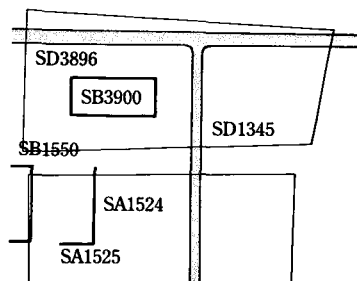
SD1347 調査区西側にある南北方向の溝。当初は素掘のSD1347Aで、のち側石をもつSD1347Bに改修される。幅0.7m、深さ0.4m。側石は30cm大の自然石。埋土は砂質土が堆積している。SD1347Aの肩は不整形に広がっており、流路も西へ少し振れているようである。

SD1476 調査区東側にある南北方向の素掘溝。幅0.8m、深さ0.2m。埋土は砂質土。調査区北側では浅くなり消失しているが、調査区外へ続くとみられる。

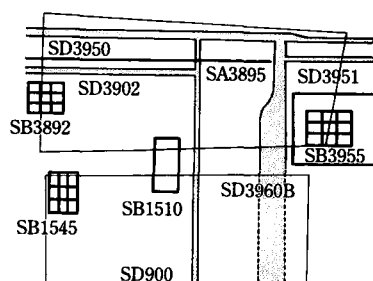
その他の遺構

SK3959 調査区中央にある長径9.5m、短径4.5m、深さ0.6mの素掘の穴。埋土は灰色粘土、上部は10cm大の礫を多く含む。時期の決め手を欠く。

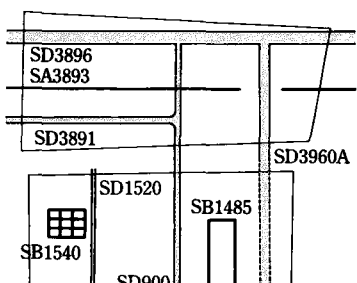
SB3961 調査区中央南側にある桁行2間、梁行2間



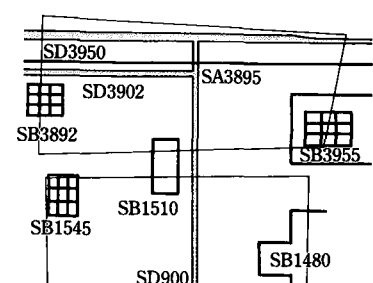
A 1 期



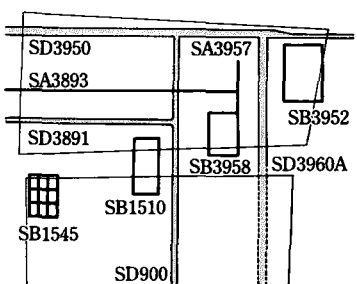
A 3-2 期



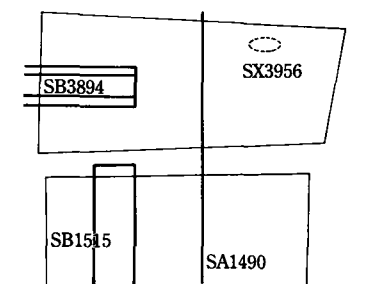
A 2 期



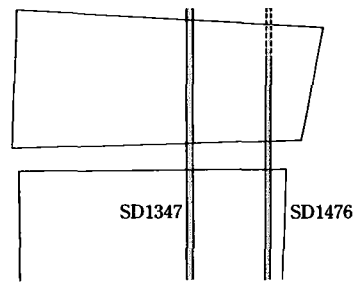
A 3-3 期



A 3-1 期



B 期



C 期

図77 遺構変遷図

の東西棟掘立柱建物。柱間は桁行1.5m、梁行1.2m。方位が大きく振れて他の建物と異なっている。

3 出土遺物

土器・瓦・金属製品・石製品・木簡などが出土した。遺物はほとんどが整理中である。

土器はC期のSD1347を中心として大量に出土し、整理用木箱290箱に達する。SD1347の遺物は7世紀各時期のものを含む。針書土器、墨書土器、転用硯なども多くみられる。今回出土した円面硯の破片が第7・8次調査出土の破片と接合し、75m以上にわたって破片が散らばっていることが判明した。漆附着土器は多数あり、そのうちSD3950から7点、SD1347から16点出土した。また新羅系かとみられる須恵質の蓋が3点出土し、他に土馬の破片数点、垂球形土製品1点がある。

瓦類のうち軒丸瓦は川原寺601型式C 2点、飛鳥寺I型式a 1点、Ⅲ型式b 2点、V型式1点、奥山久米寺Ⅱ型式E 3点、推定Ⅷ型式A 1点が出土し、軒平瓦は出土せず、丸瓦は67点(6.8kg)、平瓦は334点(24.2kg)。このほかヘラ書の可能性があるものが1点ある。過去の調査

と同様に出土量が少なく、いずれも流入したものや新しい土坑からの出土である。今次調査区でも建物は瓦葺きではなかったと考えられる。

(石橋茂登)

金属製品、土製品、石製品、動植物遺存体等は、これまでのところ整理用小型コンテナ10箱分が出土した。鉄釘、熔結銅、羽口、取瓶、ガラス罎塼、砥石、石包丁、滑石製小玉、サヌカイト・黒曜石製石器、椀形鉄滓、焼土、木炭、桃などの種子、獣骨、獣歯、琥珀、石英などがある。サヌカイトの原石および石器は計1.55kg、146点あり、整理の進捗によりさらに増加するのは確実である。剥片が131点と大部分を占めるが、他に石鏃、スクレイパー等がある。他はいずれも少量である。なお、木製品はほとんど出土していない。

(小池伸彦)

木簡は、SD1347Aの堆積土から82点(うち削屑77点)、同じく埋立土から1点、合計83点が出土した。詳細は木簡概報に依りたい。ここでは、下層出土の荷札と思われる一点を紹介する。古拙な書風である。

諸岡五十戸□□□ 126・21・3 011
諸岡五十戸は武蔵国久良郡諸岡郷(『和名抄』)のことかもしれない。
(山下信一郎/文化庁記念物課)



図78 SD1347出土木簡

4 遺構変遷

第9・13次調査区を含めて遺構変遷を整理しておく。

A期 7世紀前半から斉明朝まで。飛鳥寺と水落遺跡北側の東西大垣SA600が建てられ、石神遺跡が形成された時期である。かつて7世紀中頃の斉明朝とされていたが、A期の開始はそれより遡ると考えられる。

A1期には大規模な基幹水路が整えられ、東西方向のSD3896と、そこへT字形に流入するSD1345が造られる。ともに側石を積み上げた堅固なものである。第13次調査区には東西棟建物SB3900、第9次調査区北東にSB1550、SA1524、SA1525がある。

A2期にもSD3896は存続するが、南北の基幹水路はSD900に付け替えられる。これはSD1345より規模が小さいが、同時に南北方向のSD3960も造られる。またSA3893が設けられ、東西方向の区画施設となる。SA3893の南に平行するSD3891はSD900より西だけに設ける。SA3893南側の様相がSD900の東と西で異なるのは、過去の調査で検出している西区画と東区画の存在が関係すると考えられる。第9次調査区内にはSD900の東にSB1485、西に総柱のSB1540と小規模な石組溝SD1520がある。

A3期は斉明朝期と考えられる。過去の調査で計画的な建物配置を確認しており、石神遺跡の最盛期といえる。

A3-1期にはSD3896が埋められ、深さは浅いが大型の側石と底石を持つSD3950に造り替えられる。南北の水路はSD900とSD3960が存続する。SA3893は東側を取り壊し、南北塀SA3957とSB3958が造られ、SD3950が幅を狭める部分の南にはSB3952が建てられる。これらは北からの入口的な施設かもしれない。第9・13次調査区にはSB1510とSB1545がある。

A3-2期になるとSA3893とSD3891は北へ移動し、SA3895とSD3902になる。SD3950とSD900は存続するが、SD3960は西側石列が屈曲する形態に改修される。SB3952は撤去され、SD3951が造られる。南には総柱のSB3955が建ち、SA3953とSA3954で囲まれる。第13次調査区にも総柱のSB3892がある。

A3-3期には小さい改修が行われる。SA3895は存続するが、SD3960とSD3951の廃絶にともない東に延長される。SD3950とSD3902、SD900、SB3955などの総柱建物はいずれも存続する。

B期 7世紀後半、天武朝のころと考えられる。全体が整地土で覆われて状況が一変する。それまで南北の基幹水路があった位置に長大な南北塀SA1490が設けられ、その東西で遺構の状況がまったく異なっている。東側は建物跡がなく、断片的に石敷が遺存していたことから広場的な空間であろう。西側は第9・13次調査区において曲尺形に配置された長大な建物を確認しており、建物で囲まれた空間の存在が予想できる。

C期 藤原官期と考えられる。B期の建物は存続せず、南北2条の溝が調査区を貫いている。この溝は屈曲しつつ石神遺跡の南端付近まで確認しており、南北の通路状をなしている。

5 まとめ

以上のような成果をふまえて簡単にまとめよう。

A期はそのはじめが7世紀前半に遡ると考えられる。遺物はほとんどが整理中なので検討の余地はあるが、SD3896とSD1345、SD900との接続状況が明らかとなったことで、すくなくとも斉明朝より前から計画的で大規模な造営が行われていたことが確実となった。

最盛期であるA3期には建物や溝が密集し、きわめて短期間に改作を繰り返す状況を確認した。周辺には倉庫とみられる総柱建物が多数存在し、さまざまな物資を収納するための区域だったとみられる。また第13次調査で北限と考えたSD3896はこの時期までに廃絶し、側石と底石を持つ大型で浅いSD3950に造り替えられることが判明した。SD3950にすべての南北溝がT字形に流入しておわることから、この溝の北側は東西方向の通路的な空間だった可能性がある。

B期はこれまで遺構にまとまりを欠き、あまり注目されなかった。しかしSA1490を区切りとして、東側に広場状の空間、西側に長大な建物群が配置されていることがわかった。特に西側の建物群は注目される。またSA1490は調査区の北へ続くと思われ、遺跡の北限も今次調査区より北にあると思われる。B期にも整然とした施設の存在が考えられ、全体の見直しが必要であろう。

今後はまず第一にSD3950以北の状況を把握することが重要であるが、それとともに各時期の遺構の再検討も課題であろう。

(石橋茂登)